

Editor's Note

講評

今年度、卒業論文は3編提出されました。

藤田さんは、進化心理学的な立場で、恋愛関係におけるパートナーの身体的もしくは精神的な裏切りに対する反応、とりわけ嫉妬の様態を、ライバルの社会的、身体的諸特性の側面から分析した研究を取りまとめました。ひな形となった研究論文(Buunk & Dijkstra, 2004)の原著者にメールを出して、論文だけからはわからない事柄について質問したのに、大層不親切な応答を返されたり、多数の被験者から必ずしも快く協力を得ることができなかつたりと、色々と研究上でつらい経験ををしたと思います。その他にも、種々の苦しい経験を乗り越えて論文を取りまとめた藤田さんの努力を思うと感無量です。おめでとうございます、みきさん。

石黒くんは、幼稚園児を対象にして、対人行動の発達における2つの能力の関わり、すなわち他人の感情をどれくらい理解できるかに関連する感情役割取得能力と、対人関係の中で生じる問題をどのように解決するかに関連する対人問題解決能力、この2つの能力の関わりをスマートな実験のクリアな結果で明らかにしました。論文構成も非常に優れていたのも、石黒論文は本年度心理学科の優秀卒業論文賞を授与されました。2年間にわたる週1日の幼稚園実習と、日頃コツコツ積み重ねた勉学の努力と忍耐が報われたと思います。ぐろくん、おめでとうございます。

山上さんは、大学生における抑うつ、とりわけ抑うつの反芻と、それを軽減するための気晴らし行為としての趣味の関係性を調査によって検討しました。うつの軽減方法を探るという明確な方向性をもったこの研究は、一般的な研究の意義の大きさに加えて、臨床的な応用範囲の大きさを有するものです。研究の意義はそれだけに限定されません。心理学はそもそも、人がひとり一人より良く生きていくために必要な知識を得るための学問です。この成果は自分自身の今後の生き方にも大きな影響を及ぼし続けると思います。きおりさんも3年生のときに通っていた幼稚園から、幼稚園側の都合で実習の中断を求められるという苦しい経験をしています。卒業研究の大変さに打ち克ったのだから、今後、大概のトラブルにはへいちゃらで対応できると思います。

実習助手の榎本さんには、学科の日常業務や日本心理学会の準備の際には本部の仕事などでご多忙中、道具使用による身体表象の変容に関わる実験の結果をまとめていただきました。博士論文のデータの一部となることが期待される成果です。

山上研年報では前号(第2巻)から、研究法1=プレ卒論文を掲載することにしました。今号では6本の論文が掲載されました。早くから準備を始めて、よく完備した計画のもとちゃんとした実験データを得ることのできた論文と、スタートが遅れたためにデータが不十分だったり、あるいは論文の記述レベルが不十分だったりする論文の二極に分かれたような感想を持ちました。前者の中にはあと少しの追加の実験で卒業研究以上のレベルになることが期待されるものもありましたが、そのような人たちは、目標を卒業研究レベルよりも高いところに置き、4年になっても一層研究に打ち込んでください。期待しています。一方、後者のやや遅れ気味だった人たちは、引用論文の引き方や文献リストの作り方などの細かい点においてもまだ神経が行き届いていないところが多く、榎本さんにも校正で大変なご苦勞をお掛けしました。このようなテクニカルな論文技術をちゃんと学習する同時に、一生懸命論文を読んで研究内容を深化させて4年の終わりにホゾをかまないう精進をしてください。

今年度、残念ながら論文提出にいたらなかった諸君は、なぜそうなったのかを虚心に反省し、来年こそはすばらしい研究をまとめてください。

(2013年3月8日 山上 精次)